

令和7年度全国学力・学習状況調査の大崎市の結果について

1 調査の概要について

令和7年9月 大崎市教育委員会

【調査目的】

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、

- (1) 全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

【調査実施日】

令和7年4月17日(木)

【調査対象・事項】

小・義務教育学校6年生、中学校3年生・義務教育学校9年生：教科調査〔国語、算数・数学、理科〕 / 質問調査

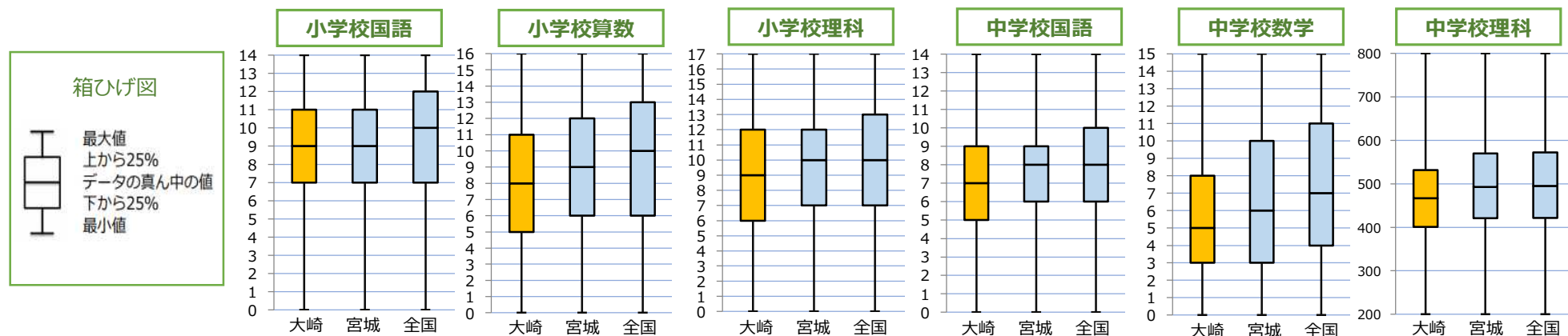
2 各教科の結果について

【平均正答数・平均IRTスコア結果／正答数・IRTスコアの分布】

※中学校理科はCBTで実施し、IRT（項目反応理論）に基づき算出したスコアにより結果を表示。IRTに基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500を基準にした得点で表したもの。

【小学校】国語は県と分布や中央値が同程度だが、算数は全体的にやや下方に分布している。理科は上位層が県と同程度、下位層の正答率はやや低い。

【中学校】国語は上位層が県と同程度、下位層の正答率はやや低い。数学は下方に分布しており、理科の得点のばらつきは全国や県と同程度である。



	小学校			中学校		
	国語	算数	理科	国語	数学	理科
大崎市	8.6/14問	8.0/16問	8.6/17問	6.8/14問	5.6/15問	474
宮城県	9.1/14問	8.8/16問	9.4/17問	7.5/14問	6.9/15問	503
全国	9.4/14問	9.3/16問	9.7/17問	7.6/14問	7.3/15問	503

令和7年度全国学力・学習状況調査の結果を受け、大崎市では「学力向上は日々の授業改善から」を基本姿勢とし、児童生徒一人ひとりのよりよい学びにつなげる取組を、**学校・家庭・教育委員会が連携して一体的に進めていく。**

授業改善 1 学ぶ楽しさや達成感を実感できる授業づくり - 「主体的・対話的で深い学び」の土台づくりと実現に向けて -

授業改善 2 ねらいと評価を明確にした単元構想 - カリキュラム・マネジメントの工夫を通して -

【教科に関する調査結果から】

小学校国語

- 話の目的に応じて内容を捉えることは概ねできている。
- 言葉の変化や世代による違いに気付くことが概ねできている。
- ▶ 目的に応じて、文章と図表などを関連付けて、必要な情報を見付けることに課題が見られる。
- ▶ 目的や意図に応じて、表現を工夫しながら自分の考えを書くことに課題が見られる。

文章を読む目的を明確にし、必要な情報を的確に捉えられるようにする。また、目的や意図を踏まえて書くことを意識させる指導を行う。

中学校国語

- 目的に応じて、集めた材料を整理し、伝えたい内容を明確にすることができている。
- 事象や行為を表す語彙について理解できている。
- ▶ 読み手を意識して表記し、文章を整えることに課題がある。
- ▶ 根拠を明確にして、自分の考えが伝わる文章を書くことに課題が見られる。

読み手の立場に立ち、語句の表記や用法、叙述の仕方を見直して文章を整える力を育てる。また、伝えたい事柄とその根拠を適切に結び付け、事実や具体例を示しながら表現する力を育てる。

【質問調査結果から】

- ◆ 約75%の児童生徒が「主体的・対話的で深い学び」に取り組んだと回答。小学校は、肯定的回答が増加傾向。
- ◆ 課題の解決に向けて自分から取り組んだと回答した児童生徒ほど、各教科の正答率が高い傾向がある。

主体的に学ぶ姿勢を育てるため、課題に見通しをもたせ、対話や振り返りを通して学びを深める。

小学校算数

- 小数の加法について、数の相対的な大きさをを用いて、共通する単位を捉えることは概ねできている。
- ▶ 異なる分母の分数の加法の計算に課題が見られる。
- ▶ 台形の意味や性質の理解に課題が見られる。
- ▶ 変化する2つの数量の関係を基に、問題解決に必要な数量を見だし、求め方を式や言葉で記述することに課題が見られる。

数学的な用語や表現の習得と活用を通して、理解を深めさせる。また、複数の情報から必要な数量を見出し、その関係を式や言葉で表現できるようにする。

中学校数学

- 事柄が常に成り立つとは限らないことを説明するために、反例を挙げることは概ねできている。
- ▶ 目的に応じて式を変形したり、その意味を読み取ったりして、事柄が成り立つ理由を説明することに課題が見られる。
- ▶ 相対度数の意味の理解に課題が見られる。

事柄が成り立つ理由を、構想を立て、根拠を明確にして説明できるようにする。また、数学的な概念や意味を理解できるように、問題の背景や数量の関係を考察する場面を設定する。

- ◆ 中学校で国語・理科が好きと回答した生徒が全国を上回る。一方、前年度より各教科で好きと回答した児童生徒が減少した。
- ◆ 各教科において好きと回答をした児童生徒ほど、各教科の正答率が高い傾向がある。

教科への興味・関心をさらに高めるため、学ぶ楽しさや達成感を実感できる授業づくりを推進する。

小学校理科

- 水の温まり方について、問題に対するまとめを導き出す際、観察や実験方法が適切であったかを検討し、表現できている。
- 水が温まると体積が増えることを根拠に、海面水位の上昇した理由を予想し、表現することは概ねできている。
- ▶ 電池の直列つなぎに関する理解に課題が見られる。
- ▶ 花のつくりや受粉のしくみに関する理解に課題が見られる。

観察や実験を通して、しくみや動きを実感をもって理解できるようにし、言語活動を通して理解を深めさせる。

中学校理科

- 加熱を伴う実験における器具の操作等の技能が身に付いている。
- 大地の変化について、時間的・空間的な見方を働かせて、土地の様子とボーリング調査の結果を関連付けて、地層の広がり捉えて表現できている。
- ▶ 気体の密度の違いを分析・解釈する場面で、実験の様子と密度に関する知識・技能との関連付けに課題が見られる。

観察や実験を通して、結果と対象となる事象や性質との関係に気付き、身近な自然現象について考えるきっかけとなるように指導を行う。

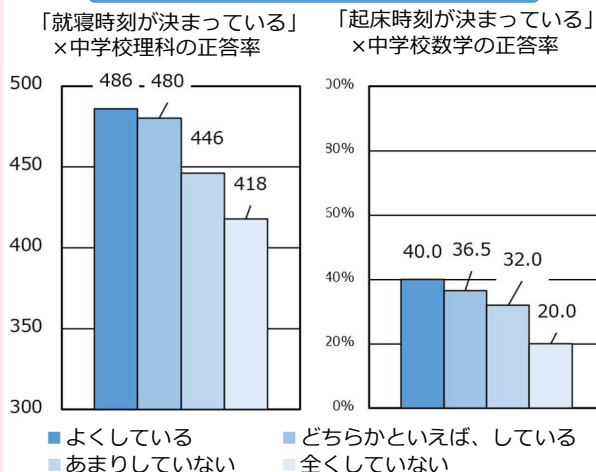
- ◆ ICT機器を授業で週3回以上活用した割合は、小・中学校とも、前年度より大きく増加した（学校質問紙では、小学校99.9%、中学校100.0%）。中学校の活用率は、全国平均を上回る。
- ◆ ICT機器を活用する自信がある児童生徒ほど、各教科の正答率が高い傾向がある。

ICT機器の効果的な活用をさらに進め、学習効果の向上を図る。

取組 1 家庭学習の習慣化 - 生活リズムの「3点固定」 -

- ◆ 約9割の児童生徒が起床時刻が決まっていると回答。しかし、就寝時刻が決まっている児童生徒は、8割とやや低い。
- ◆ 規則正しい生活習慣が定着している児童生徒ほど、各教科の正答率が高い傾向がある。

生活習慣と正答率



生活リズムの「3点固定」とは、

- ①起床時刻
- ②家庭学習の開始時刻
- ③就寝時刻

の3つの時刻を毎日固定する生活習慣のこと。
十分な睡眠時間を確保して体調を整え、毎日決まった時刻に勉強することで学習習慣を身に付けることができる。また、自分で決めた時刻を守ることで、目標達成に必要な自己コントロール力も育むことにつながる。

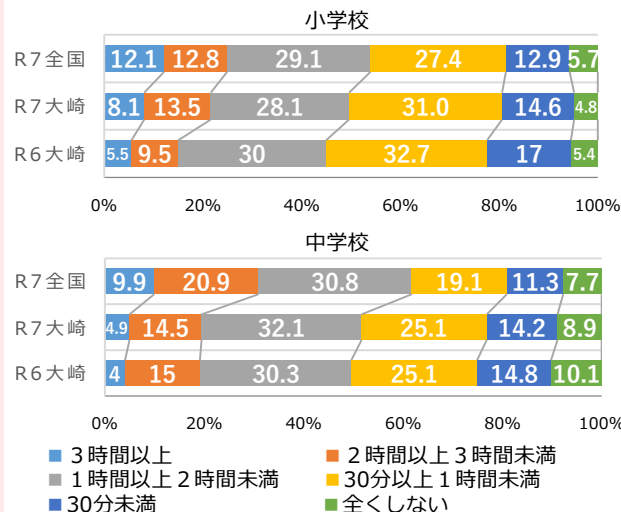
取組 2 家庭学習の時間の確保 - 学習の量の向上 -

- ◆ 学校の授業時間以外の平日の勉強時間について、1時間以上勉強する児童生徒の割合は、小・中学校とも約50%。
- ◆ 平日において、1時間以上勉強すると回答した児童生徒は、前年度より小・中学校とも増加した。
- ◆ 休日の勉強時間についても、1時間以上勉強する児童生徒の割合は、小・中学校とも約50%。
- ◆ 平日の学習時間が30分以下の回答は、小学校19.4%、中学校23.1%で、4～5人に1人の割合。全くしないという回答は、中学校8.9%。

平日の学習時間

1時間以上：

【小学校】49.7% (全国54.0%)
【中学校】51.5% (全国61.1%)



平日、休日とも、家庭学習で一定の学習時間を継続して確保することが必要。

取組 3 家庭学習の内容の工夫 - 学習の質の向上 -

- ◆ 分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができる、約75%の児童生徒が回答。約4人に1人の割合の児童生徒は、自分で学び方を考え、工夫することはできていないと回答。

主体的な学習の調整

自分で学び方を考え、工夫することができる：

【小学校】75.0% (全国81.7%)
【中学校】75.9% (全国77.5%)

- ◆ 新聞を読んでいる児童生徒の割合は、1割未満。

新聞を読んでいる割合

【小学校】8.4% (全国10.5%)
【中学校】3.4% (全国5.7%)

- ◆ 家庭学習にICT機器を使用している児童生徒は、70%以上で全国より上回る。
- ◆ ICT機器の使用時間では、小学校では30分～1時間程度、中学校では30分～2時間程度の児童生徒が、各教科の正答率が高い傾向がある。

家庭学習でのICT利用率

【小学校】76.1% (全国74.6%)
【中学校】73.9% (全国69.7%)

- ①家庭学習の目標設定や、学習内容の振り返りを行う。
- ②新聞や「よむYOMUワークシート」等を活用して、読解力向上を図る。
- ③学習内容に応じて、ワークやAIドリルを使い分ける。特にAIドリルは、間違いの傾向を分析して問題やヒントが自動で出題されるため個別最適化が可能。

1 学力向上4つの柱に関する取組

(1) カリキュラムマネジメントの工夫

- ・単元全体を見通し、ねらいと評価を明確にした授業づくりを行う。
- ・「学力向上年間計画」を基にPDCAサイクルの循環促進を行う。また、年間および単元計画に基づいた系統的な指導内容の見直しを図る。

(2) 授業改善

- ・「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、児童生徒自らが課題の解決に向けて考える場を確保するとともに、学習意欲を高める工夫を行う。
- ・「おおさきスタンダードみのり」や「授業評価シート」を活用する。

(3) 集団づくり

- ・学級経営の質が学力にも直結することを意識し、総合質問紙調査「i-check」等の活用による実態把握を生かして安心して学べる学級づくりを強化する。
- ・朝の会や帰りの会、日常のやりとり等を通して、自己肯定感や学びに向かう意欲を高める指導を行う。

(4) 小中連携

- ・小中学校間における指導内容・評価の共通理解を深め、スムーズな学びの接続を図るとともに、各校の学力向上につながる取組を行う。
- ・研修会等を通して、中学校区の児童生徒の実態や共通の課題を共有する。

2 各種調査結果の活用

(1) 全国学力・学習状況調査の結果の分析

- ・成果と課題を明確にし、学校の指導改善の計画に具体的に反映させる。
- ・校内研修等を通じて結果を全職員で共有し、組織的な改善につなげる。

(2) 標準学力調査（東京書籍）の活用

- ・全国学力・学習状況調査と併せて年2回の標準学力調査を比較分析し、学校全体でつまずき解消期間も含めてPDCAサイクルを確実に実施する。

3 読解力向上事業・学力向上推進事業

(1) よむYOMUワークシートの活用

- ・朝学習や国語科の導入などで継続的に使用する仕組みを整える。
- ・学校内外での実践を共有し、活用方法の工夫と改善を図る。

(2) ロイロノートの活用

- ・思考の可視化や意見交流に活用し、児童生徒が自分の考えを整理・表現する場面を設ける。
- ・他者の意見を共有することで多角的な思考を促すとともに、ペアやグループでの意見交換、カードの共有を通じて、協働学習を充実させる。
- ・プレゼンテーションなどの発表活動を取り入れ、表現力の向上を図る。

(3) タブレットドリルやAIドリルの活用

- ・学習のつまずきを個別に把握し、個別最適な学びの実現を目指す。
- ・児童生徒の活用状況を把握し、継続的な取組が可能となるような仕組みを構築する。
- ・ドリルの結果を教師が把握し、指導に生かすサイクルをつくる。

4 家庭学習の充実

(1) 学習習慣の定着

- ・家庭学習の目標設定や振り返りを取り入れ、児童生徒が主体的かつ目標をもって取り組める工夫をする。
- ・家庭学習用教材として、タブレットドリルやAIドリルを活用する。
- ・授業と家庭学習を関連付け、より効果的な取組になるように工夫する。

(2) 家庭との連携強化

- ・学校・学級だよりや懇談会等で継続的に情報発信し、保護者と家庭学習のあり方や学習状況を共有する。
- ・スマートフォン等のメディアの使用について、使用時間や時間帯の制限を設けるなどの家庭でのルールづくりを推進する。

学力向上の実現は、学校・家庭・教育委員会の協働が欠かせないものであり、大崎市においては、学校・家庭・教育委員会がそれぞれの立場から、児童生徒1人ひとりの成長を支え、未来を切り拓く力を育んでいけるように各取組を推進していく。